「言葉を拠りどころに読み深める力」を育てる国語科授業の在り方（二年次）
－児童の学びをつなぐ単元デザインを通して－

伊達市立掛田小学校　福島県教育センター　長期研究員　菊池　祥子

１　研究の趣旨

小学校学習指導要領解説国語編では、〔知識及び技能〕と〔思考力、判断力、表現力等〕を相互に関連させて育成することや、学習の系統性を意識した螺旋的・反復的に繰り返す過程を重視することが示されている。しかし、令和５年度全国学力・学習状況調査「読むこと」領域における福島県の結果は、〔知識及び技能〕と〔思考力、判断力、表現力等〕がともに低く、効果的な関連が図られていないことが推察できる。

また、福島県教育委員会令和６年度学校教育指導の重点では、育成すべき資質・能力の明確化、前後の学年等、学習の系統性を意識した単元づくりが、授業改善の視点として示された。併せて、第７次福島県総合教育計画で掲げる「学びの変革」を推進し、児童に育成すべき資質・能力を確実に身に付けさせていく必要がある。

本研究では、「読むこと」領域の文学的文章の学習において、「言葉を拠りどころに読み深める力」を「作品中の叙述や表現等の必要な情報同士を関連付け、思考をまとめながら、自らの考えをより確かなものにしていく力」と定義し、その育成を目指す。第一年次研究における単元構想の工夫を基盤に、児童の学びをつなぐことで、主題の力を育成できると考え、以下の仮説を設定した。

２　研究の概要

小学校国語科「読むこと」領域の文学的文章の学習において、児童の学びをつなぐ単元デザインの工夫として、以下の手立てを講じれば、「言葉を拠りどころに読み深める力」を育成することができるであろう。
【手立て１】学習課題を導出するための工夫
【手立て２】一人一人の学びやすさに対応するための工夫
【手立て３】考えの変容を判断、実感できる振り返りの工夫

(1)【手立て１】学習課題を導出するための工夫
これまでの学びから、児童の「わからないこと」を明確にし、問いを見いだすための基準を児童とともにつくる。基準を使って見いだした問いを基に、児童が学習課題を導き出せるようにする。

(2)【手立て２】一人一人の学びやすさに対応するための工夫
一人一人の「学びやすさ」に応じて、学習課題やワークシート等を児童自ら選ぶ場面を設定する。交流では、ワークシートを自らの考えを説明する際の拠りどころとして活用できるようにする。

(3)【手立て３】考えの変容を判断、実感できる振り返りの工夫
考えの変容を客観的に判断するための振り返りの観点を、これまでの学びを基に児童とともにつくる。観点を使うことで、児童が自らの考えの確からしさやよさ、変容を実感できるようにする。

３　成果と今後の課題

(1) 研究の成果
○　作品を超えて活用できる基準や観点により、児童自身が作品をどのように読んでいるかを自覚することにつながった。また、前学年などの学びとのつながりや自らの成長を実感する児童の姿が見られた。
○　ワークシートを含めた学習の個性化により、自分の考えを伝え合うための拠りどころができたことで、協働的な学びが充実し、考えをより確かなものにすることにもつながった。

(2) 今後の課題
○　児童とともにつくった基準や観点に、表現の効果に関連するものがなかった（評価テストの平均点における有意な上昇なし）。指導事項をさらに意識した、基準や観点のつくり方への改善を図る必要がある。また、協働の場面を工夫することにより、多くの情報にふれることができるようにし、考えをより確かなものにしていくことにつなげたい。